秋田県男女共同参画情報誌

ラ ヴィータ：イタリア語で“生命・人生・生活”

La Vita ラヴィータ

2013.10.31

vol. 84

心を満たす働き方・暮らし方
～やりたいことをあきらめない～

特集1 ワーク・ライフ・バランスの先駆者として

特集2 活気ある秋田を、次世代に渡したいから

「ワーク・ライフ・バランス」って何？

知ってるつもり!?イマドキの男女共同参画
「マタハラとパタハラ」

ラ ヴィータな人々シリーズ ～育休を取った男たち～

市町村からこんにちは。(潟上市)

輝き☆高校通信 秋田県立能代松陽高等学校(能代市)

いきいきクローズUP「上小阿仁村 地域活性化応援隊」

いんふぉめ～しょん
「輝く女性フェスタ2013」を開催しました。
第一生命保険株式会社と
「ワーク・ライフ・バランス推進連携協定」を締結しました。

La Vita [ラヴィータ] vol.84 2013年10月31日発行
あきたの女性 創刊平成元年6月20日

編集・発行／秋田県生活環境部男女共同参画課
〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号 TEL.018-860-1556 FAX.018-860-3895 http://www.pref.akita.lg.jp/（県の国際きたネットのトップページ）

連載♪ まいちゃんの素朴な疑問

介護はある日突然に。急な事態でも、お互いさまの気持ちでカバーし合えたらいいですね。

いんふぉめ～しょん INFORMATION

「輝く女性フェスタ2013」を開催しました。

9月7日（土）、秋田ビューホテルを会場に「輝く女性フェスタ2013」を開催しました。フェスタではトークショー、ステージショー、講演会、分科会などが行われ、様々な分野で活躍している方々からお話ししていただきました。会場は和やかな雰囲気に包まれ、出演者や参加者同士の出会いと交流の場となりました。

基調講演の講師は、日本IBM（株）の伊藤久美理事。主婦、契約社員から現在に至るまでを振り返り、「企業内起業家という、自分の仕事を面白くするスタンスでやってきた。好奇心を持って働くこと。質問力も必要」などと、キャリアの作り方を紹介しました。

第一生命保険株式会社と「ワーク・ライフ・バランス推進連携協定」を締結しました。

10月18日（金）、県と第一生命保険（株）との間で「ワーク・ライフ・バランス推進連携協定」を締結しました。これは、第一生命保険（株）秋田支社が県内事業所を訪問した際に、県内における「ワーク・ライフ・バランス」（以下WLB）推進のため、県の事業や第一生命保険（株）の取り組みを紹介していただくもので、京都府、宮城県に次いで本県が3例目となります。当日開催したWLB講演会も、協定に基づく活動の一環として実施したものです。第一生命保険（株）に協力していただくことで、県内事業所のWLBに対する理解がより一層深まることが期待されます。

編集後記

30代女性の92%は「職場のリーダーではなくメンバーになりたい」ということが、日本能率協会グループの調査で判明。それは仕事と生活の両立が難しいから？同時期実施の羽後高3年の意識調査では「女性が上司でも協力する」が73%を占めた。彼らが30代の頃には両立が可能な社会であってほしい。（佐藤 万里子）

穏やかな口調で真摯に質問に答えてくださる上手社長に「従業員を叱ることはありますか？」と聞いてみました。社長は笑いながら「そりゃ、ありますよ。危険なことが起こりそうなときは、やはりね。ケガをしたら、みんな困るでしょう」。あくまでも従業員とその家族のことを考えているのですね。（坂本 佐穂）

「La Vita」を読んでのご意見・ご感想をお寄せください。お待ちしています。

秋田県生活環境部男女共同参画課
〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号

TEL.018-860-1556 FAX.018-860-3895
E-mail:persons@pref.akita.lg.jp

「ワーク・ライフ・バランス」という言葉は知っていても、何から始めたらよいのかわからない、という声も聞かれます。

実現を目指して取り組むふたつのケースを紹介します。従業員の「ワーク・ライフ・バランス」を推進する企業の考えと、自らの意思で挑戦を続ける夫婦の姿勢。やりたいことをあきらめないためには、どんなことが必要なのでしょうか。

心を満たす働き方・暮らし方
～やりたいことをあきらめない～

特集 1

ワーク・ライフ・バランスの先駆者として

株式会社カミテ　代表取締役社長

上手　康弘さん

株式会社カミテ（小坂町）はプレス金型の設計及びプレス加工が中心の家電製品、OA機器、医療機器等、金属部品の加工会社。平成12年「働く女性支援優良企業」（秋田県）、平成13年「ファミリー・フレンドリー企業表彰・厚生労働大臣努力賞」（厚生労働省）、平成20年「第1回 ワーク・ライフ・バランス大賞」（ワーク・ライフ・バランス推進会議）、「子どもと家族を応援する日本・功労者表彰」（内閣府）等、多数受賞している。

ワーク・ライフ・バランス（以下ＷＬＢ）に取り組んだのは、平成12年に託児所を開設したのが始まりです。当時、総務課長だった女性が育休から復帰した時に「託児所があればいい」という要望がありました。ほかの妊娠中の従業員からも同じような声があり、実現に踏み切りました。

従業員と直接面談をして、仕事のこと、家庭のことも含めて話を聞きます。働き方の要望があればその声を吸い上げて、それをまたみんなで考え、制度を充実させてきました。その中で「残業なしで早く帰りたい」「子どもと遊ぶ時間を取りたい」という声がありましたので、会社全体で子育てしやすい環境を作り、従業員の意識を高めて生産性を上げるという目標を掲げました。

欠員が出たときにカバーできるように「多能工」のシステムを整えて、誰かが休んだ時でもそのポジションにするのではなく、重要なのは従業員のニーズに応えるということ。働きやすいようにするのが目的なので、制度だけが先行して従業員が使いにくいものでは意味がありません。

工場のすぐ近くにある託児所「カミテ・チャイルドハウス」

従業員は「コスト」ではなく「資産」

ＷＬＢは企業にとって、将来へのリスク管理にもなります。介護に携わる年代の人は管理的立場にいることが多いですから、幹部が休んでも会社を回せるようでなくてはなりません。また、男性も介護に携わらなければならない時が来ています。

私たちが目指しているのは、やさしく強い企業。「やさしい」は従業員に対して、よい制度が作られているのですから、これを維持できるようにしていかなければなりません。「強い」は技術革新をしながら企業体としてもっと強くなければと考えています。企業として体力がないと、やりたいこともやれないですからね。

制度を整えて、製品の不良率が下がりました。従業員の士気を高めるということで効果があったと思います。ＷＬＢによって、従業員にチームワークができたと感じています。さらに、より優秀な従業員が集まってくるようになりました。これから労働人口が減っていく中で、私たちのような中小企業はきちんと制度が整っていないと、いい人材を集めることはできません。ＷＬＢを実践することで、効率よく仕事をして生産性を高めることや、地域の活動に関わることができる。従業員は「コスト」ではなく「資産」です。１円でも安く従業員を使おうと思っている人や、育児や介護が女性だけのものと思っている人には理解できないかもしれませんが、男性にも企業にも、そして社会全体にとっても、ＷＬＢは大きなメリットがあります。

ニーズに応えて働きやすく

育児だけでなく、介護についても支援しています。ＷＬＢは育児期だけのものと思われがちですが、育児を終えた人も、家族の介護でいずれ助けてもらうことになるかもしれません。また、ボランティアやお祭りなどの地域活動でも、制度がちゃんと使えるようにしています。地域活動に参加することで、個人だけでなく、企業としても地域とのつながりが生まれていると思います。みんながカバーしカバーされ、「おたがいさま」の気持ちでバックアップし合えることが大切ですから。

親を病院へ連れて行く、子どもの運動会に参加するなんて、当たり前のことなんですよ。子どもが病気の時に仕事に集中できる親はいません。その日は休んで、次の日からきっちり働く。その方がいい仕事ができるはずです。

育児休業をとった男性従業員は２名います。育児休業の取得で育児の大変さを理解できたからこそ、子育て期間中は早く帰宅する、子どもの行事に積極的に参加するなど、臨機応変に対応できます。その体制を会社として整えるのも大事です。託児所を設置することがＷＬＢというぐつけるようにしています。例えば、託児所の常勤保育士は２名ですが、ほかに資格を持っている工場勤務の従業員がいて、常勤の保育士が休んだ時にはその男性がカバーに回っています。

従業員は大切なパートナーです。辞められたらこちらが困ります。結婚しても辞めずにすむという安心感もあってか、従業員に占める女性の割合が増えてきました。現在はほぼ半々で、共働きも多くなっています。ＷＬＢに取り組むことで、これから結婚・出産を控える人たちにもいい影響を与えられていると思います。

託児所の設置以来、預かる子どもがゼロになったことはないという。

ご夫妻で、輪茶（わっちゃ）プロジェクトを立ち上げて今年で7年目。フリーペーパーの発行や「輪茶フェス」の運営など、仕事と生活と地域活動を両立させている2人に聞きました。

大輔さん：「秋田はつまんない～」という人がいますが、僕らの周りには元気な人が多い。そういう元気な人を増やし、何かを「始める人」を増やして秋田を活気づけたいと、27歳のときから趣味でフリーペーパーを発行しています。

置いてくれる店舗は当初の56軒から現在は240軒に。毎月の小遣いを貯め、数回分で1号発行する。発行部数も1，500部から、現在では4，500部になりました。表紙の絵を描くなど、多くの人が関わってくれています。

活気ある秋田を、次世代に渡したいから

輪茶（わっちゃ）プロジェクト（秋田市）
石岡　大輔さん（会社員）
石岡　真理子さん（助産師）

助産師としてコラムを担当

真理子さん：秋田にも「これをやりたい」という面白い店長さんたちがいるので、その刺激を受けることで誰かが夢を再発見できたらいいと。お店の宣伝ではなく、自分がどういう思いで店をやっているかということを紹介しています。

大輔さん：「始める人を応援」と言っても、最初はみんなイメージがわかず、ボロクソ言われました。ぶれずに続けているうちに周囲も変わった。途中で止めずに本当によかったと思います。

真理子さん：私は子育て中の人たちの役に立てるよう、助産師・真理子でコラムを書いています。「輪茶」があるから、私のことも地域に知ってもらえる。

以前、洋服屋さんで働いていたとき、同僚の女性たちが出産や妊娠について意外と知らないと感じたことがあり、女性の体のメカニズムについても一緒に考える場にしたいと思いました。すぐには捨てられないフリーペーパーにしたいので、上質の紙を使い、女性が好きそうな柔らかいデザインを心掛けています。

今年8月に開催した「輪茶フェス」の様子。
2,500人ほどが来場し、大盛況！

時間は自分で作るもの

大輔さん：編集作業は2人の子ども（7歳・4歳）が寝てからになります。時間は自分で作るもの。現在では仕事と家庭以外に、「輪茶の石岡」というポジションが自分の中に出来上がっています。雑貨市の「輪茶フェス」もそうですが、やりたい人が自ら名乗り出るという立候補型。夏冬の年2回、会場となる秋田拠点センター・アルヴェで、1回開催につき65店舗が販売をします。これも先着順で。

点在している人やグループ同士がつながると輪が大きくなる。その橋渡し役になりたい。また、家族みんなで楽しめるのもフェスです。小さな子どもや子育て世代が多く集まるので、理想は「居心地がいいね。また来よう！」です。これからもずっと秋田にいたいから、子どもたちも楽しめる秋田にしたいと思っています。自分が楽しいことをやるために、家族で一緒にやろうという父親が増えるといいですね。

真理子さん：今年5月、助産院を開業しました。出張専門です。ご自宅に伺って産前産後のケアをしたり、育児サークルや小中高校に出向いてお話をしたり。ママたちがやりたい夢をあきらめず、時間をやりくりし、自分の気持ちがキラキラ輝くものをみつけてほしいと思っています。

秋田パフォーマンススタジオによるステージショーも行われた。

輪茶　検索
http://watcha.michikusa.jp/

ワーク・ライフ・バランスって何？

「ワーク・ライフ・バランス」は、日本語では「仕事と生活の調和」と訳されます。

「仕事」は暮らしを支え、生きがいや喜びをもたらします。また、家事や育児、介護、地域活動、生涯学習、趣味などを含む「生活」も、生きていく上で重要な要素です。

しかし、例えば働きすぎで家事に手が回らない、育児や介護のために仕事を諦めざるをえない等、「仕事」と「生活」のバランスがとれていないと、身体や心のバランス、さらには家庭や地域との関係を崩してしまうことにもつながりかねません。

この「仕事」と「生活」のバランスをとり、多様な生き方を選択・実現できるようにしようという取り組みが、「ワーク・ライフ・バランス」です。

皆さんも、自分なりのワーク・ライフ・バランスについて考えてみませんか。

知ってるつもり!? イマドキの男女共同参画「マタハラとパタハラ」

世の中では「ワーク・ライフ・バランス」の動きが広がりつつあります。しかし一方では、こんな言葉もあるのをご存知でしょうか…？

マタハラ（マタニティ・ハラスメント）

「働く女性が妊娠・出産にあたって職場で受ける精神的・肉体的な嫌がらせ、いじめ」を意味します。

妊娠中や出産明けに心無い言葉をかけられたり、解雇や自主退職を促されたり、重労働や残業を強いられるケースも含まれます。

パタハラ（パタニティ・ハラスメント）

パタニティとは「父性」のこと。パタハラは「男性社員はこうあるべきだという先入観により、上司が部下の育休取得を妨げる」水面下の動きを意味します。

育児に積極的に参加する「イクメン」たちが増えている一方で、男性の育休取得率が伸び悩む背景には「男は仕事」という考えが未だ深く根付いているのでしょうか。

一人ひとりが相手を理解し、思いやる気持ちが職場に浸透すれば、これらの問題を解決する糸口へとつながるかもしれません。

ラ ヴィータな人々 シリーズ 第23回

育休を取った男たち

株式会社協同企画湯沢ロイヤルホテル

調理師　菊地 允瑠（みつる）さん（34歳）

平成24年3月9日から
21日間の育児休業を取得

妻の入院・出産後も家にいられて安心だった

育児休業に公休と有給を合わせ、5月15日まで68日間、休ませていただきました。第2子出産の予定が5月上旬だったのですが、妻は2月上旬に切迫早産の疑いで入院。その間は、妻の実家の両親に長男（当時1歳）の面倒をみてもらい、休日に自分がみていました。一度退院したものの、産むまで再入院ということになり、緊急を要するので職場に相談。「仕事のことは心配しないで」と言ってもらいました。

それまでも家事に協力していましたが、いざ自分一人で長男をみるとなると、大変でした。夜中にオムツを替えたときに、偶然ベッドの上でおしっこをされてしまい、シーツを替えようと離れたすきに下に落ちていたことも。食事や着替えなど、子どもの機嫌がいいときはすんなりできても、そうじゃないときは何を訴えているかわからない。子どもが駄々をこねても、イライラしないで優しく接していた妻は偉いと思いました。段々、一緒にいる時間が長くなるにつれて、なついてくれましたが。

職場の理解に感謝

妻は無事に女児を出産。出産後のまだ体調が万全でないときにも、自分が家にいられて安心だったし、子どもへの愛情も深まりました。大変さがわかった分、もっと手伝いたいし、もっと子どもと遊びたいと思っています。

育休中の期間は、ホテルは大繁忙期でした。職場の多くの人に迷惑をかけ、申し訳ない気持ちが強かったですが、「よく戻ってきてくれた」と、温かく迎えてもらいとても嬉しかったです。

湯沢ロイヤルホテル
中野慎一・取締役総料理長のお話

菊地さんがいる中華料理の人員は少なく、1人でも抜けると困る状態でしたが、奥さんの具合が悪いとのこと。和食・洋食のメンバーで協力し合い、中華のヘルプシフトを組みながら調整しました。

私も3人の子どもがいますが、やはり妻が切迫流産の危険性があって、職場を1週間ほど休んだことがあります。状況がわかるので、家庭の事情を優先させたいと思いました。最近、和食の調理師も3番目の子どもが生まれ、特別休暇と公休を合わせて1週間休んだところです。家庭あっての仕事。休みを取りやすい職場づくりに取り組んでいます。

市町村から こんにちは。

今回は、潟上市の男女共同参画センター「ウィズ」についてご紹介します。

Q. どんな施設ですか？

A. 事務室と学習室の2つの部屋があり、男女共同参画に関する学習会はもちろん、団体での活動や打ち合わせ等にも利用できます。冷暖房完備。パソコンやコピー機も利用できるほか、託児スペースもあります。利用料は無料です。

Q. 普段はどんな風に利用されていますか？

A. 子育て支援団体が託児イベントを行ったり、市民団体が男女共同参画についての勉強会を行ったりしています。

Q. 利用時間、休館日等を教えてください。

A. 利用時間は午前9時から午後9時30分まで、休館日は毎月第2月曜と年末年始です。利用を希望する場合は、潟上市企画政策課企画政策班までご連絡ください。

団体活動だけでなく、ご近所や仲間同士で気軽に利用したいですね。

申し込み・問い合わせ先
潟上市 企画政策課 企画政策班
電　話：018（878）9802

輝き★高校通信。

秋田県立能代松陽高等学校（能代市）

「檜山茶」を紅茶に!?

ビジネス情報部あきんどう部門に所属する山崎侑斗さん（2年生）、竹内瑠菜さん（同）、藤田千穂子さん（同）、安田葵さん（同）、佐藤優香さん（1年生）、柴田雪乃さん（同）にお話ししてもらいました。

今年の夏休みから、商品開発の一環として、「檜山茶」という茶葉を使った紅茶作りに取り組んでいます。檜山茶は能代市特産の、緑茶として加工されている品種で、およそ280年間品種改良されずに受け継がれる、宇治系のお茶の木の原種です。栽培農家は1軒しかありません。

紅茶に加工するにあたり、茶葉にうまみを引き出すのに必要な糖分が少なく、味わいが出せないのが難点でした。そこで、県総合食品研究センターに相談し、茶葉の発酵に白神こだま酵母を使ってみることに。すると、紅茶らしい味わいが出るようになってきました。今は、商品化を目指し、納得できる味わいになるよう何度も実験を重ねているところです。商品化の際には、パッケージや商品名も自分たちで考えることになります。

納得できる味わいが出せるよう、試行錯誤を重ねている。

「檜山茶」を使った紅茶作りに取り組むみなさん。

能代松陽高校は、能代商業高校と能代北高校が統合し、平成25年4月に誕生しました。紅茶作りの活動は、能代松陽高校と檜山茶、両方のアピールにつながると考えています。様々な活動を通し、地域に愛される学校になって欲しいです。

いきいきクローズUP

上小阿仁村 地域活性化応援隊

少子高齢化が進む秋田県の中でも、上小阿仁村は若者不足の悩みを抱える地域のひとつ。今から4年前、桝本杉人さん（滋賀県出身）と水原聡一郎さん（神奈川県出身）が「地域おこし協力隊」としてやって来たのは、現在7世帯14名の人々が暮らす、自然豊かな八木沢集落でした。2人は、3年間の任期を終えた後も「地域活性化応援隊」として村に留まり、地域づくりに貢献しています。

表向きには「限界集落」と呼ばれる場所で、2人を笑顔で迎えてくれたのは、ここで明るく、逞しく生きている村の皆さんでした。彼らが人々の生活をサポートするのと同じくらい、村の人たちは、2人を温かく見守り、応援してくれています。

アートイベントは今年も大盛況！左から運営スタッフの河原崎彩子さん、桝本さん、学生ボランティアの大谷心さん。写真右はポスター。

村の特産物「フルーツほおずき」の栽培やPR、26年もの間途絶えていた伝統芸能「八木沢番楽」の復活などに加え、昨年から始まったアートイベント「KAMIKOANIプロジェクト秋田」の運営も、彼らと住民たちがともに協力して実現できた、村の〝新たな動き〟です。アートを媒体に、小さな八木沢集落を訪れた人の数は、昨年の57日間だけでなんと9千人以上！数々のメディアにも注目されるようになった上小阿仁村は今、その魅力を全国へと発信しています。

「人や自然美など、お金には換算できない豊かさが村にある」と水原聡一郎さん。

「活動を通じて、人々の生き生きとした姿を見ることができて嬉しい」と桝本杉人さん。

連絡先　●上小阿仁村役場
☎0186（77）2221（代）